新たな認知症治療医療と介護の連携を推進

「メリハリのある検査と高度な治療は勿論、更に音楽療法やドッグセラピーなど個人個人に合った療法をリハビリテーションに組み入れることで認知症は改善されることもあるのです」

開院から約2年間で既に600名を超える認知症患者を退院させた認知症専門病院「トワーム小江戸病院(埼玉県川越市)」に医療界から熱い注目が注がれている。設立者の医療法人社団・松弘会理事長の済陽輝久(わたようてるひさ)氏は認知症の治療に急性期の病院の対応や先進的療法を取り入れることにより症状を改善する取り組みを続けている。「全ての認知症が不治の病ではない」と語る済陽氏の取り組みと医師を志した理由を聞いた。

三愛病院・トワーム小江戸病院理事長（医療法人社団松弘会理事長）
済陽 輝久 Watayou Teruhisa

母親の認知症がきっかけで認知症専門病院を設立

――「すべての認知症が不治の病ではない」という基本理念で、認知症専門病院「トワーム小江戸病院」を埼玉県川越市に開院しましたね。認知症患者は介護施設で対応されることが多い中で、敢えて認知症患者の専門病院をつくった理由から聞かせてください。

済陽 この病院の開設に当たっては、わたしの母への想いがありました。

母は高脂血症（血液中のコレステロールと中性脂肪の一方または両方が増加する状態）に注意が必要な状況でしたが血圧を下げる降圧剤を飲む程度でした。息子のアドバイスを聞かないがんこな親で三愛病院（同法人が運営する埼玉県さいたま市にある急性期病院）に検査入院を勧めるわたしの言うことは聞かなかったのです。もし入院していれば大病を予防することができたのですが、ある日わたしの目の前で倒れました。不整脈だったので、すぐに応急処置で体外ペーシングを行い一命はとりとめたのですが、わたしがその場にいなかったら心停止になっていたことでしょう。しかし、数年後には再度自宅で倒れてしまいました。所見は脳出血でした。

しかも、後遺症の脳血管性認知症（認知症のうち、脳梗塞・脳出血などで脳の一部に障害が起こり、認知能力が低下するもの）を患ってしまったのです。

――通常、認知症になればグループホームなどの介護施設に入居させるものですね。

済陽 ええ。ただ、介護施設に入居した患者は必ずしも治療を受けるわけではありませんでした。しかも、三愛病院でもそうでしたが、診ていた患者でも認知症を発症してしまうと、その患者さんは介護施設に移されます。そうなると、その患者さんと診ていた医師や病院とのつながりは切れてしまうんです。

場合によっては、必要な治療も受けられずに亡くなってしまうこともあります。そうであるならば、これを解消して最期まで患者さんの治療に当たる体制を作ろうと考えました。

それが三愛病院に加えて介護老人保健施設の「トワーム指扇」（同県さいたま市）と「トワーム熊谷」（同熊谷市）、介護付き有料老人ホームの「トワームみずほ台」（同富士見市）、そして認知症専門病院の「トワーム小江戸病院」を相次いで開設した理由です。これらはそれぞれタイプの異なる医療施設なので、症状に合わせて医療連携を密に行うことができます。具体的には、全ての施設は電子ネットワークで結ばれており、個々の患者情報の共有が可能となっていて、最もふさわしい施設で治療・介護が受けられます。

また、トワーム小江戸病院と三愛病院では特に医療連携を強化しており、この結果として一連の診療体制が整備されています。

トワーム小江戸病院内には、マルチスライスCT、一般レントゲン、外科用イメージ、超音波診断装置、気管支鏡、経鼻内視鏡、大腸ファイバー、カプセル内視鏡、日本初の胃癌用内視鏡、SAS（睡眠時無呼吸症候群解析器）、人工呼吸器、高気圧酸素治療装置、トレッドミル、1・5MRI（三愛病院で共同利用）といった一般の認知症病院では見かけない機器をも含め完備しております。また、現在は三愛病院で共同利用しているMRIについても年内には最新式の米国GE3・0テスラタイプを導入し、手術室なども新設予定です。

音楽療法・ドッグセラピー、園芸療法などを採用

――認知症の患者を治療する医療機器が揃っているわけですね。そこまで済陽さんが思いを抱く理由とは何ですか。

済陽 とにかく手を尽くして認知症を治していくんだという思いです。ですから、医療機器の他にも、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士によるリハビリを積極的に取り入れ、特に最近は言語聴覚士による食事訓練や発声トレーニングにも力を入れています。また精神面をケアする臨床心理士も三名在籍しております。また特殊療法として、東邦音楽大学とタイアップした音楽療法や常勤のドッグセラピストによるドッグセラピーや自社牧場での種豚育種改良、肉豚生産を手掛けるサイボクハム（同日高市）の指導による園芸療法といった個人個人に合った療法をリハビリテーションに組み入れているんです。

また散歩道として季節の草花、果樹、芝生で覆われ、農園もある広い前庭の周りに三百㍍のコースが設置され、悪天用には院内に巾三㍍、一周百㍍の回廊コースも設けられております。

――そういった療法でお母さんの病状も改善されたと。

済陽 はい。わたしの母は開院時から入院していたのですが、常々女学生時代の話をしていたので、回想療法を試みたんです。母の旧友にメッセージをお願いしたり、当時住んでいた町を撮影したりして、それをビデオレターとして母に見せたんです。

そうしたら、心ここにあらずの状態で、無表情だった母の顔色が見る見るうちに変わりました。そして、昔の思い出話を語りながら笑顔を取り戻したんです。認知症とは治らない病気ではないと感じた瞬間でしたね。

――その出来事が済陽さんの原点にもなったということですね。そもそも医師を志した理由は何だったのですか。

済陽 わたしの出身地は宮崎県都城市なのですが、わたしの父方の祖父は材木屋を営んでいました。日露戦争時に軍艦や兵舎を作るための材料・原料をつくっていました。その後、わたしの父は一九五一年に警察予備隊に入隊し身を捧げていました。

全国各地を動いていた中で、わたしの母と出会ったわけです。母方は医者の家系で、母方の祖父は産婦人科の開業医でした。日曜、祝日も関係なく仕事に追われ、家族で一泊旅行さえできませんでしたよ。わたしは二人きょうだいだったのですが、兄は最初から医者になると決めていたようです。

――済陽さんも医者になりたいと思っていたと。

済陽 いいえ。実は、わたしは小さい頃から工作とか飛行機、いわゆる工学系が好きでした。ですから、将来はパイロットになりたいとも思っていました。

ところが、高校時代、勉強もせず遊んでばかりいたこともあって浪人してしまったんです。

父は「医学部を卒業したら何をやってもいい」と言ってくれました。そこでその年、猛勉強をして何とか医学部に入学することができたんです。

全身管理を知るため麻酔科医に

――医師としての道を歩むことになったわけですね。

済陽 実は、医学部を卒業してすぐに、福島県で会社を起業したんですよ。父から卒業後は何をしてもいいと言われてましたから。しかし、その秋にはその父を含めた家族から大学に戻るように説得されて、同大学の整形外科に入局したわけです。この医局ではいろいろな経験をさせていただきました。

実際に医者として実務に携わってみたら知らないことだらけでした。一ヶ月間で二十五日も当直したことがありましたね。この間は、忙しかったですが知識を忘れる暇もなく非常にいい勉強になりました。

患者の尊厳を重視し、愛情込めた医療の提供を目指す「トワーム小江戸病院」

わたよう・てるひさ
1975年東邦大学医学部卒業。78年まで同大学院整形外科で勤務。日赤医療センター麻酔科、磯子中央病院勤務を経て、85年に三愛病院設立、院長に就任。総合診療科、整形外科、麻酔科を担当。97年医療法人社団松弘会理事長に就任。2008年6月トワーム小江戸病院開院。日本麻酔科学会麻酔科認定医、健康スポーツ認定医、身体障害者認定医。

医者というのは医学部を卒業して初めてメスを手にします。病院実習はありますが、基本的には座学の勉強一辺倒になりがちなんです。その意味では、病院での当直勤務や救急病院での急患を診察しては、実地で技術と知識はもちろん、数多くの経験を得ることができましたね。

――この現場での体験で、どんなことを感じましたか。

済陽 二年間大学病院で実践を経験し、執刀の技術を向上させるためにも、さらなる全身管理を知る必要があると考えまして、日赤医療センター麻酔科に入ったんです。

――麻酔医ならば、様々な手術に立ち会えますね。

済陽 その通りです。ここでは科ごとに縫合の仕方や糸の質などに違いがある事を知り、また、麻酔科医として手術に参加し、そこから医療の実際を見ることで、医師ごとの力量の差も歴然と分かるようになりました。

ただ、現場では麻酔医であっても次は術者であるという自覚を持っていましたので、麻酔をかけながら腕の良い医師には何でも質問しました。それからいろいろなことを教わりながら、助手もさせてもらうようになったんです。そういう経験を通して、こういう病気のこういう手術はこれがコツだなと総合的に勉強することができました。

先生は院長、職員は社長という当事者意識こそ大事！

――そのことが三愛病院の設立の上でも貴重な体験になったということですね。

済陽 ええ。一つの病気に一人の医師が全てを把握できるわけではありません。それを踏まえて、早い段階から放射線科の医師に来てもらうようにしました。この結果、複数の医師による確認にもつながりましたし、診断の正確性の向上にもなりました。今はやりのチーム医療ですね。

――なるほど。三愛病院の場合、他の病院との違いというのはどんな点にあるのですか。

済陽 大きな違いは先生一人ひとりが院長であり、職員は社長であると。全員がそういう考えを持ってやる様に指導しているんです。経営者と従業員という考え方がありますが、わたしはそういった考え方を持っていません。

病院も医者も患者が選ぶんだという基本から考えれば当然だと思うのですが。

自分たちが良い暮らしをしたかったら、良い診断、良い治療をすれば良くなると。そういう意識を持てば非常に仕事が楽しくなります。

――スタッフ全員が当事者意識を持てと。

済陽 そうです。三愛病院・トワーム小江戸病院では職員みんながニコニコしながら、疲れた顔もせずに働く。「忙しい」などとは決して言いません。したがって、当院では一部で使われていた「お疲れさま」という挨拶が変だという事になり、現在は「お疲れ様でした撲滅運動」に発展しております。

病院の理念としては①患者さんへの愛と思いやりの心、②地域を愛する心、③医療に奉仕する心を挙げておりますが、今年のグループのモットーとしては、組織が急拡大した中で再度原点に戻ろうということで、人に対する「思いやり」を第一に掲げております。

グループが拡大した事に伴って、提携している関係会社も十九社を数えるようになり、全体の業務の合理化、効率化をはかっておりますが、一番大切なのは「人」だと思います。

定年（就業規則上は六十歳）を超えたスタッフでも、各々の体力・気力・能力・貢献度にあった仕事をしてもらう環境は整えており、実際に多くの方に継続してバリバリ働いてもらっています。

こうした中で、病院開設以来二十五年を過ぎ、スタッフの二代目が多数親と同じ職場へ自ら望んで入職してくるようになりました。感慨深いものがあります。